

グローバルデザイン提案書：出雲市

福嶋浩彦*

はじめに

出雲市は島根県中東部に位置し、松江市に次いで県内2番目の人口を抱える。出雲大社をはじめとする歴史・文化遺産に恵まれ、「神話の国・出雲」として全国に知られている。JR山陰本線が走り、出雲空港から羽田、大阪、福岡、仙台便などが就航している。

市は2022年、新しい総合振興計画である『出雲新話2030』（2022～2029年）をスタートさせた。その基本理念は「だれもが」みんなが活躍するまちづくり、「どこでも」地域の魅力を生かしたまちづくり、「いつまでも」持続可能なまちづくり、の3つである。

出雲市は外国人住民の比率が高く、国籍別で見るとブラジルが圧倒的に多い。その大部分は、市内大手企業で働く従業員（派遣労働者）とその家族である。「みんなが活躍するまちづくり」は、この外国人の存在なしには語れない。

市は現在、『出雲新話2030』に先立つ2020年に定めた第2期『出雲市多文化共生推進プラン』（2020～2024年）に基づいた取り組みを進めている。この提案書では、できる限り市民の視点から、多文化共生とはそもそも何であるのか、どんな課題があり、どんな未来を描けるのかについて探っていくことにする。

目次

I 出雲市のグローバル・プロファイリング

1. 基本情報
2. 経済の状況
3. 観光・文化交流
4. 外国人の生活・居住
5. 多文化共生の課題

II 座談会「多文化共生の未来に向けて」

* 中央学院大学社会システム研究所教授

I 出雲市のグローバル・プロファイリング

1. 基本情報

図1 出雲市の地図



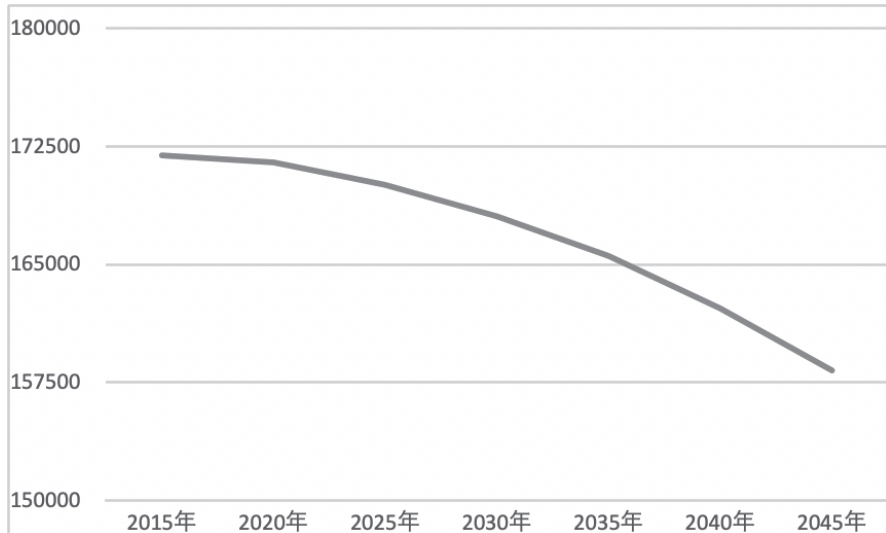
出典: 出雲観光タクシーホームページ

- (1) 面積 624.36km¹
- (2) 現在人口、172,887 人²

1 国土交通省国土地理院『令和3年 全国都道府県市区町村別面積調(4月1日時点)』国土交通省国土地理院、2021年、58頁。
2 令和2年国勢調査 人口速報集計。

(3) 国立社会保障・人口問題研究所による将来人口推計 158,260 人 (2045 年)

図2 出雲市の将来人口



(国立社会保障・人口問題研究所『日本の地域別将来推計人口』2018年推計より)

(4) 出雲市独自の将来人口推計 (2045 年)

出雲市は 2020 年 3 月、『出雲市まち・ひと・しごと創生「人口ビジョン」・「第 2 期総合戦略」』の中で、2045 年に 163,427 人という独自の将来人口推計を行っている。

これは、2040 年の合計特殊出生率を 2.30 と仮定 (2013 年は 1.75)。また 2030 年までは年間 320 人社会増になると仮定した推計である。かなり希望的な予測に見える。

(5) 在留外国人データ

2021 年 3 月末の外国人住民人口は 4,846 人 (35 の国と地域) で、人口に占める割合は 2.8% である。在留資格別に見ると、永住者 886 人 (18%)、日本人・永住者の配偶者等 656 人 (14%)、定住者 2,254 人 (46%)、特別永住者

135 人 (3%)、技能実習 581 人 (12%)、留学 40 人 (1%)、その他 294 人 (6%) となっている³。

(6) 出雲市の財政状況

2018 年度の出雲市の財政力指数は、全国平均を 100 とした場合、105.88 である。実質公債費比率は、全国平均を 100 とした場合、254.10 でかなり高い⁴。

2. 経済の状況

(1) 地域経済の概況

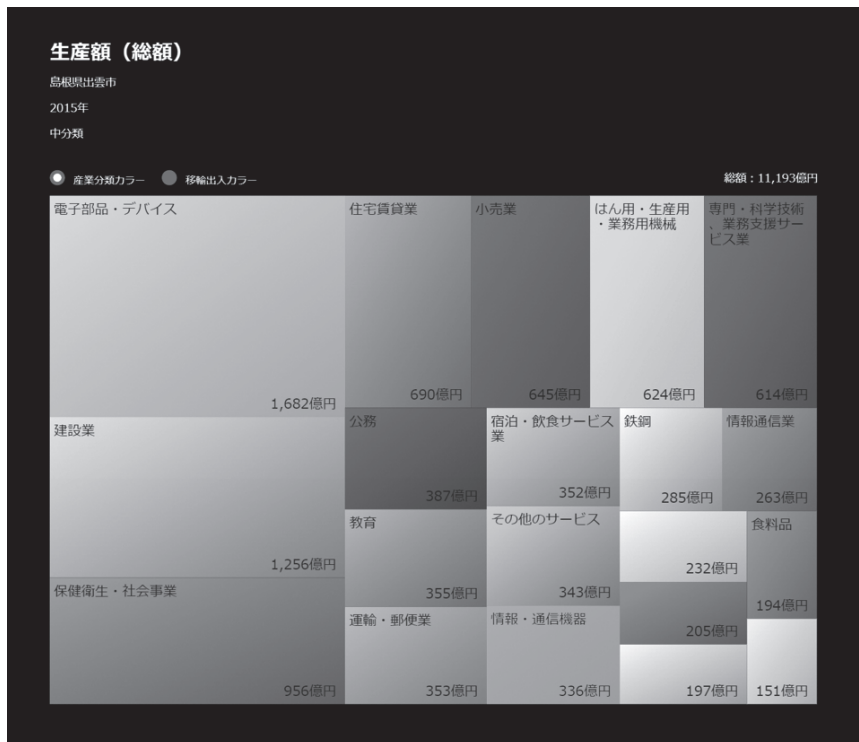
RESAS 生産分析によると出雲市の 2015 年の生産額 (総額) は 10,714 億円、その内訳は、第 1 次産業 (農業) 154 億円 (1.4%)、第 2 次産業 4,298 億円 (40.1%)、第 3 次産業 6,262 億円 (58.4%) である。第 2 次産業では電子

3 出雲市文化総合政策部政策企画課文化国際室「出雲市における多文化共生にかかる取り組みについて」。

4 RESAS 地方財政マップ「自治体財政状況の比較」。

部品・デバイス 1,426 億円、建設業 1,215 億円、住宅賃貸業 926 億円、小売業 730 億円の比重第 3 次産業では保健衛生・社会事業 971 億円、⁵ が大きい⁵。

図 3 RESAS 地域経済循環マップ「生産分析 産業分類」出雲市



(2) 農業

2015年の耕地面積は7,730ha、農業就業人口は3,560人。販売農家数は2,487戸で、主業農家335戸、準主業農家316戸、副業的農家1,891戸となっている⁶。

農業産出額（2018年）は総額125億円で、内訳は米51億円、野菜20億円、果実18億円、生乳16億円、肉用牛9億円など⁷。

(3) 企業数・事業所数・従業者数・

付加価値額⁸と賃金水準⁹（2016年）

企業数は6,009社、事業所数は8,240事業所で、従業者数は74,293人である。その付加価値額（企業単位）は2,140億円。一人当たりの労働生産性は400.6万円で、全国平均の544.9万円より低い、島根県平均374.3万円よりは高い。賃金水準は283.0万円。

5 RESAS 地域経済循環マップ「生産分析 産業分類」

6 農林水産省「わがマチ・わがムラ 市町村の姿 グラフと統計で見る農林水産業 基本データ 島根県出雲市」

7 RESAS 産業構造マップ「品目別 農業産出額」

8 RESAS 産業構造マップ「全産業」

9 総務省統計局「平成28年経済センサス活動調査結果」における「給与総額」と「福利厚生費総額」の合計を「従業者数」（A～R 全産業（S 公務を除く））で除して算出した。

3. 観光・文化交流

(1) 観光地

縁結びで知られる出雲大社は、“神在月”（11月）に「全国の神様が集う神秘の古社」（出雲観光協会公式ホームページより）であり、大国

主命が祀られている。他にも、高さ日本一を誇る日御碕灯台など多くの観光スポットに恵まれている。日本百景にも選ばれた宍道湖にも接している。



出雲大社本殿（出雲観光協会公式ホームページより）

(2) 訪日外国人旅行者訪問数（2019年）

訪日外国人旅行者の昼間（10-18時）の滞在者数は、月平均5,210.2人/月である¹⁰。

国・地域別では、中国、台湾、香港が2千人を超え、次いで韓国が千人を上回るが、他は500人以下である。コロナ禍前のデータでは、近隣アジア諸国が多くを占めている。

(3) 訪日外国人旅行者宿泊数（2019年）

訪日外国人旅行者の夜間（2-5時）の滞在者数は、月平均3,078.5人/月である¹¹。

「令和元年度出雲市観光動態調査報告書」（出雲市経済環境部観光課・株式会社コスモブレイン）によれば、外国人宿泊者延べ数は11,552人泊であり、前年度から46.7%増加している。

(4) 観光案内所の多言語対応

多言語対応の観光案内所が6つある（出雲空港 総合案内所、出雲市駅 観光案内所、神門通り観光案内所、日御碕ビジターセンター、道の駅キララ多伎、道の駅湯の川）¹²。

出雲市観光課では英語、中国語、韓国語、フ

10 RESAS 観光マップ「外国人滞在分析」。

11 RESAS 観光マップ「外国人滞在分析」。

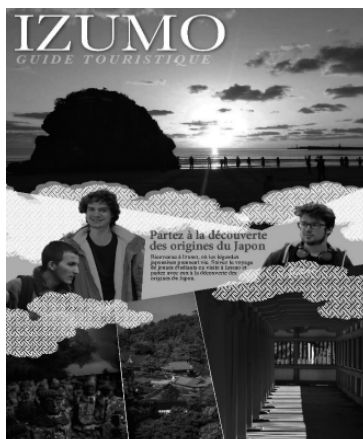
12 日本政府観光局「JNTO 認定外国人観光案内所」一覧。

<https://www.jnto.go.jp/jpn/projects/visitor_support/list.html>

ランス語の観光パンフレットを発行している
(右はフランス語版の表紙)。

(4) 医療機関の多言語対応

多言語対応の病院は4カ所(出雲市民病院、島根県立中央病院、出雲市総合医療センター、医療法人沖繩徳洲会 出雲徳洲会病院)。その他、英語のみ対応可能な病院が8カ所¹³あり、訪日外国人旅行者へも対応している。



(5) 魅力度・認知度・観光意欲度(2020年)¹⁴

魅力度 28.3 認知度 43.0 観光意欲度 42.6
となっている。市区町村の平均は、魅力度 9.2
認知度 23.2 観光意欲度 18.9であり、出雲市
は非常に高いことが分かる。

(6) 友好・姉妹都市締結

海外との友好・姉妹都市は、以下の各市と結
んでいる

- ・友好交流都市 ダンレアリー・ラスダウン市
(アイルランド) 2008年6月5日締結
- ・友好姉妹都市 カラキヨ市(フィンランド)
2003年5月8日締結
- ・文化観光友好都市 エビアン市(フランス)
2002年2月15日締結
- ・友好都市 漢中市(中国)
1996年11月2日締結
- ・姉妹都市 サンタクララ市(アメリカ)
1986年10月11日締結

(7) 高等学校による海外派遣事業

島根県立出雲高等学校ではアメリカ・サンタクララ海外研修(普通科)、シンガポール海外研修(理数科)を行っている¹⁵。

(8) 留学生受け入れ

出雲市内にキャンパスのある島根大学医学部
では積極的に留学生を受け入れている。

同大国際センターのホームページによれば、
2021年5月1日現在で留学生は44人(大学院生43人、
研究生1人)。バングラディシュ19人、中華人民
共和国14人、インドネシア6人をはじめ8カ国から
受け入れている。

4. 外国人の生活・居住

(1) 外国人住民の全体像

1.(5)でも述べたように、外国人住民比率
(2021年)は2.8%(人口174,708人、外国

13 日本政府観光局「日本を安心して旅していただくために 具合が悪くなったとき」

<https://www.jnto.go.jp/emergency/jpn/mi_guide.html>

14 「地域ブランド調査2020」(前掲注35)における「魅力度」、「認知度」、「観光意欲度」の3つの点数を合算した値。

15 島根県立出雲高等学校「サンタクララ海外研修」

<<https://www.izumo-hs.ed.jp/category/ssh-cate/ssh-cate2019>>

人4,846人)である。就労活動の制限のない者(定住者、永住者など)が80%を超えるのが特徴になっている。また、単身滞在から家族滞在に変わり、長期滞在や永住する人が増加傾向で、5年定住率は37.0%で4割に近づいている¹⁶。

国籍別で見ると、ブラジルが3,423人で圧倒的に多い。次いでベトナムが416人、中国が301人、フィリピン214人、韓国135人である。2.(1)のRESAS生産分析で電子部品・デバイス部門が最も大きな割合を占めていたが、特にブラジル国籍の人はその中核企業で働く従業員が多い(派遣労働者)。企業からのサポートも期待できる反面、企業退職=市外(県外)転出になってしまう可能性が大きい。

さらに、「令和元年度島根県外国人実態調査(出雲市分)」から引用しながら概観してみる。これは、20歳以上の外国人住民1,050人を対象とした調査で、アンケート回収数は247人である。

○自治会(町内会)の加入

加入していないと答えた人が72.9%で、圧倒的に多い。

○地域での日本人との付き合い

あいさつをする程度が55.1%で、それ以上の付き合いがある人は28.3%である。

一方、近くに住む日本人との交流の希望については、65.6%の人が積極的に交流したいと答えている。

○日本語について

多少でも聞き取れる人が82.2%、多少でも

日本語が話せる人が87.0%である。

○困っていること

特にないが37.7%だが、病気やけがをしたときのことが24.3%、会社や仕事のことが17.4%、子ども(進学、出産・育児)や家庭のことが13.4%となっている。(2つに回答)

○外国人であることを理由にした差別や人権侵害

差別や人権侵害を受けたと感じたことのある人36.8%、感じたことのない人59.9%で、感じたことのない人のほうが多いが、4割弱の人が感じたと答えていることは真剣に受け止める必要がある。

感じた人の中で、どのような場面で感じたかは、会社の人の言葉や態度が58.2%、通りすがりの人の言葉や態度が45.1%である。(複数回答)

○よく利用するメディアや情報

SNS(Facebook、Twitterなど)が一番多く66.6%、次いで会社からが50.6%となっている。また、日本人以外の友人38.1%、母国語のメディア35.2%など、母国語で情報を得ている人も多い。(複数回答)

○どのような情報が必要か

医療・病院・福祉が66.6%、就職・仕事が30.4%となっている。(3つを回答)

○望む行政サービス

日本文化、生活習慣、日本語などを学ぶ機会の充実が46.6%、行政窓口での通訳の充実が44.1%、行政情報の多言語化の充実が40.5%で上位を占めている。(3つを回答)

16 1.(5)と同じ。出雲市文化総合政策部政策企画課文化国際室「出雲市における多文化共生にかかる取り組みについて」。

(2) 外国人住民への日本人住民の意識

「多くの外国人が暮らしていることにどう感じるか」という問いに対し、「地域の経済を支える労働力として必要である」が49.4%、「言葉や習慣・文化の違いがあり、コミュニケーションがとりにくく不安である」が43.2%、「同じ地域で生きるパートナーである」は21.6%である。(出雲市令和元年度市民満足度調査より複数回答)。

半数近くが、外国人住民は、労働力不足の地域経済を支えるためにやむを得ない存在という意識にとどまっているようだ。

(3) 市としての外国人住民受入れ体制

出雲市は外国人住民の受け入れ態勢を以下のように進めている(中央学院大学社会システム研究所アンケート調査への出雲市文化国際室からの回答 2021.12.20 による)。

<生活全般>

○多言語による情報提供

市のホームページ、フェイスブックにおいて、ポルトガル語、英語、やさしい日本語による情報を掲載している。

○外国人住民向け生活相談

しまね国際センターによる出前相談を月1回実施している。

○外国人住民向け就労支援・労務相談

求人情報チラシを多言語で提供している。外国人住民向け企業説明会も開かれている。

<教育>

○外国にルーツをもつ子どもの就学・教育支援
在籍校において日本語指導を実施している。
来日直後の日本語がわからない児童・生徒に

対しては、集中的に日本語を指導している。

○外国人住民向け日本語教育

ボランティアによる日本語教室を開催している。

○外国人住民向け日本文化・習慣紹介は
実施していない。

<医療>

○多言語対応の医療機関に関する情報提供

島根県において、県内の医療機関の情報を一括公開している。

○医療機関の多言語対応

(多言語問診票/通訳・ボランティア等)

出雲市立総合医療センターでは、県統一の多言語問診票の使用や多言語コールセンターの利用で対応している。その他、通訳の配置やタブレット利用をしている医療機関がある。

○健康診断・健康相談

子どもの健診(3歳児健診、1.6歳児健診、4カ月健診)に通訳を配置している。

<防災>

○多言語での災害情報提供

市のホームページ、フェイスブックに、ポルトガル語、英語、やさしい日本語での情報を掲載している。

○多言語での防災訓練

外国人住民向け防災訓練の実施の際に通訳を配置している。

○緊急時の所在の把握は実施していない。

<啓発>

○外国人住民に対する地域活動への参加促進

コミュニティセンター等での地域活動情報を多言語で提供している(一部地域)。

○日本人住民に対する異文化理解／

多文化共生教育

国際交流員による異文化理解講座、ポルトガル語講座を実施している。

○人材育成（多文化共生・外国人関係部局の

職員・相談員に対する研修・研究会等）

新規採用職員向けに多文化共生に関する研修を実施している。

(4) 外国人の住民投票権

現在、住民投票条例は制定されていない¹⁷。

5. 多文化共生の課題

市としての外国人住民受入れ体制は、4. で見たように「出雲市多文化共生推進プラン」に基づき進んでいる。ただし、「多文化共生」とは本来、＜日本人＞と＜外国人＞を分けたうえで2者の共生を図ることではない。地域の従来の社会システムを維持しながら、そこに入ってくる外国人を支援するのであれば、いつまでも支援する側—支援される側という関係は固定される¹⁸。従来の社会システムを多様な市民がともに生活できる、多様な生き方が認められるものに変えてこそ「多文化共生」になる。

出雲市直江コミュニティセンターでは、「外国人住民のためのお役立ち情報」という豆リーフレットを発行している。直江エリアの防災避難所、病院電話番号、イベント、学校の制服・体操服販売店などがコンパクトに掲載され、実際には地域の日本人住民にとってもお役立ち情報

となっている。そして地域イベントでは、外国人住民が運営側の一員として参加するようになっている。

また、日系ブラジル人を中心とした農業団体「イズモ・アグロブラジル」は、定住希望のブラジル人の収入を支えるとともに、地域の耕作放棄地を農地化し、出雲市の環境美化に寄与することを目的にしている。さらに、キャッサバなどブラジルで親しまれる野菜の普及を目指し、市教育委員会や学校と連携してキャッサバの学校給食メニューへの取り入れを進めてきた。

これらはまだまだ小さな実践かもしれないが、こうした取り組みを一つ一つ積み重ねていくことが多くの人たちの意識を変え、多文化共生への道を拓くであろう。



イズモ・アグロブラジルのリーフ

17 ウィキペディア「住民投票条例 投票資格の範囲」。

18 「島根県出雲市の現場から」堀西雅亮—JACA 中国『『多様な社会』を考える学びのプログラム集

II 座談会「多文化共生の未来に向けて」

IIでは、Iの5.の問題意識を踏まえ、2022年12月7日、出雲市で多文化共生の課題に取り組む3人の方に集まっていただき、多文化共生の現状と展望について語ってもらった。もちろんここで一つの結論が出たわけではないが、本提案書における問題提起としたい。



福嶋：皆さま、お忙しいところありがとうございます。今日は、出雲市が一生懸命「多文化共生プラン」に取り組んでおられる中、市内で働き、お住いの外国人の皆さんが、とくにブラジルの方が多いと思いますが、地域で生活するパートナーとして一緒にまちをつくっていく可能性についてお話しできたらと思います。将来の方向が少しでも見えたら嬉しいです。

実は、出雲市の「令和元年度市民満足度調査」の中で、「多くの外国人が暮らしていることに、どう感じるか」という日本人への質問があるのですが、市民の皆さんの回答を見ると「地域を支える労働力として必要」という答えが49.4%です。一方で、「言葉や習慣文化の違いがあるからコミュニケーションが取りにくく、

●出席者（敬称略・発言順）

堀西 雅亮

（島根県外国人地域サポーター・出雲市）

今岡 三保（出雲市役所文化国際室）

瀧沢 実 セルジオ

（イズモ・アグロブラジル代表）

●コーディネーター

福嶋浩彦（中央学院大学）

不安」が43.2%です。これは、複数回答なので、どちらにも回答できるのですが、半数近い方が、この2つを回答されています。これに対し、「同じ地域で生きるパートナーである」と答えた人が21.6%です。

ざっくり言うと、労働力が足りないので外国人は必要と思うが、文化が違うので不安もある、というところでしょうか。これは多分、出雲市民というより日本人全体の感覚だと思います。

私はやはり、多文化共生というのは、同じ地域で生きるパートナーであるという回答が一番多数になることだと思うのです。この回答が多文化共生のパロメーターではないでしょうか。この回答をどうすれば増やせるのか、というのが私の問題意識です。

まず皆さんから、多文化共生の社会像をどのように描いておられるか、あるいは市としてはどんな社会、地域を考えておられるのかをお聞きして、その後、具体的な取り組みをお話してきたらと思います。堀西さんに口火を切ってもらってよろしいですか。

堀西：はい。ありがとうございます。21.6%ということですね。多文化共生という言葉が、出雲市でも5～6年の間にかかなり浸透して、いろいろなところで使われるようになって、市民の方も、多文化共生とはこういうことかと思われる方が増えてきていると思うんです。メディアなどでも取り上げられることが多いですし、セルジオさんも、あちこちでテレビにも出られたりしています。

一方で、私の一番初めのかかわりは、阪神淡路大震災の年に神戸で日本語教師になったことなのですが、その年、外国人被災者の支援活動をされた市民の方々が中心となって多文化共生センターという団体が大阪でできました。その10年後ぐらいに、私も多文化共生センターに参画させてもらったのですが、そのときに、「多文化共生」とはどういうことかと、生意気にも先輩方に意見したり聞いたりしたのです。そこで教えていただいたのが、「多文化共生という言葉は、少なくとも、マイノリティから出た言葉ではない」ということでした。ある論文に、それは社会の多数者の側が作り出した言葉であり、社会の中の少数者は、そのような丸みを帯びた言葉ではなく、差別をしないでほしい、権利を認めてほしいなど、直接的な言葉で社会に対して発信するのだと書いてあり、衝撃を受けたのです。

そこに原点があって、今、こうやって多文化

共生という言葉が市民権を得るようになってきたと思うのですけれども、広まっていくほど、最初に始めた人たちの思い、考え方などが薄れていく、ということがあると思うのです。

何となく、みんなが仲よく日本人と外国人の共生みたいに捉えられることが多いのですが、私はそうではないと思っているのです。もともと多様な人が暮らしていて、言葉が違う人がいれば、文化が違う人も、出身が違う人もいます。いろいろな人がいるはずなのですが、どうしても今までのシステムだと、その社会に含まれない人が出てくる。それを、排除される人がいない社会にどう変えていくか、マイノリティの人が権利を認めてほしいと言わなくてもよい社会にどう近づいていくか、それが広い意味での多文化共生であり、自分の中では、それを目指したいと思っています。

福嶋：ありがとうございます。次に市としてプランを作っておられる出雲市は、多文化共生として、どのような社会を描いておられるのでしょうか。

今岡：第二期多文化共生推進プランの、冒頭にも載せているのですけれども、出雲市では、平成28年に第一期、多文化共生推進プランを作りました。その背景として、やはり外国人住民が増えてきて、行政サービスに対するニーズも、いろいろなことが求められるようになってきました。そこで、具体的に第一期多文化共生推進プランを作りましたけれども、そのときは、どちらかという外国人住民への支援という形に重きを置いて作った経緯があります。

そうするうちに、新たな在留資格の創設、企業の人材不足、経済活動のグローバル化など、日々社会・経済情勢が変化していき、やはり外

国人住民が安心して暮らせるまちを目指していかないといけないということに重点を置くようになりました。今は、外国人住民、日本住民も一緒になって、誰もが安心して暮らせるまちづくりを進めていくことを目標として進めています。根本的にはそういったことが大事だと思っています。

福嶋：外国人の方が安心して暮らし、そして日本人と一緒にまちをつくっていくということでしょうか。

今岡：一期だと、通訳の配置だとか、どちらかという支援という形だったものが、外国人住民も日本人住民と一緒にまちをつくっていく、というところに視点を置いているのが第二期プランになります。

福嶋：ありがとうございます。今、お二人の話を聞かれて、滝浪セルジオさんから何か思うこと、あるいは自分はこういう考えだということをお話しただけならと思います。

セルジオ：お話をなるほどと思って聞いていたのですけれども、きれいな言葉で言ってくれてはいますが、やはり、文化の違いというのは、本当にすごいことです。僕はブラジル日系人で、半分は日本人です。しかし、合わせるのは本当に大変です。今の4世、3世など、来ている人がたくさんおられますので、そこで合わすというのは、本当に難しいです。

何が一番必要かと思うには、スピーディーで何でもやること。なぜかといったら、多文化共生でみんなで集まって話するのはいいことですけれども、そこで、何か止まってしまったら意味がありません。もう一つは、命令されるのが、外国人というかブラジルの人はあまり好きじゃないので、普通に合わせていくということ

が一番普通じゃない。

その違いがありますので、どうやっていこうかなど。僕は、出雲市佐田町に工場を建ててブラジル村を作るつもりです。そこまでしないと誰もしてくれないです。そこまでやって、ブラジル人が、あまりひどい目に遭わないように、日本はこういうところで、そういう文化がある、そういう説明をもう少しして教えながらやっていこうかと思っています。

市はいろいろなことをしてくれるのですが、そこで終わってしまうんです。始めだけで、後は交流しながら皆さんでメールしましょう、というようなことがたくさんあります。

本当のこの生活、日本人とブラジル人の生き方、どうやっていくか。ブラジルの文化をここに持ってくるのではなく、合わせていくということが一番難しいです。合わせるというのは、日本の文化とブラジルの文化をそのままくっつけるということではなく、日本の文化もブラジルの文化も「変わっていき」、それまでとは違う日本文化、ブラジル文化になるのです。「合わさった文化」はそれまでの日本文化でもブラジル文化でもないものです。例えば、「残業する」という言葉は、日本在住のブラジル人の間では、そのまま「ザンギョウ」という動詞として使われるポルトガル語になっています。もちろんブラジル本国では違うポルトガル語が使われています。このように本来の文化も変わっていくんです。

そこを、僕は、わざわざ工場まで建てて施設を作りながらやっています。誰も知らないかもしれないですが、これは4年目に入っています。誰も手伝ってくれません。そこをもうちょっとスピーディーにやってくれたら、住民たち、ブ

ラジル人、日本人の交流があると思います。

福島：具体的なお話をしていただきましたので、もう少しお聞きできたらと思います。やはり文化を合わせるのが大変なのでしょうか。

セルジオ：ブラジルの文化といたら、自由のことが多いです。何でも言ってもいいのですが、尊敬してもらいたい。何が一番、問題が起きているかと思ったら、言葉の壁です。日本にいるのだから日本語を話してくださいという人が多いのです。90%ぐらいです。日本人がポルトガル語を覚える気があまりなく、難しさが出るので、もうちょっと考え方を変えてほしいです。多文化共生のいろいろな支えとして、外国人も支え、日本人のほうも支えて交流できるようにしてほしいのです。

ただ、あまりに長い時間がかかってしまうから、自分で施設を作ってやるということを今、始めています。難しいことは分かっていますけれども、今、いろいろな人と考えながらやっていこうと思っています。

ブラジル人も日本人との間で差別します。そして、日本人も差別します。それは言葉の壁です。話できないから、何か聞かれると大変と、思って逃げるのです。日本人が何言っているか分からないから、逃げるのです。こうなってしまう。

交流はたくさんあります。パーティーしましょうとか、あります。その代わり、その日だけです。食べて、飲んで終わり。そこをもうちょっとしっかりやりたくて、僕は、みんなが集まって話せる場所まで作りました。誰も言わなくても、外国人に必要だったら作ってあげたいと思っています。僕も島根県に8年目になっているのですが（日本在住は30年以上）、こ

のまま終わってしまわないよう自分でやっていこうと思ってやっています。

福島：日本人がポルトガル語を学ぶ場は、今まで、出雲の中の身近なところにあまり無かったのですか。

堀西：少ないです。民間ではNPO ブラジルサポートセンターとNPO エスペランサの教室ぐらいです。以前、島根県立大学の市民講座でポルトガル語講座がありましたが、今はされていないようです。

今岡：市の生涯学習講座の一部としてはポルトガル語講座をやったことがあります。

セルジオ：インターネットの講座もありますが、やはり、ポルトガル語を覚える難しさが出てきます。ブラジルの人も日本語を覚えたいのだけれども、やはり、難しさがすごく出てくる。どうやって教えていくか考えたほうがいいと思います。

一番の問題は派遣会社です。派遣会社は、ブラジル人が日本語を話さなくてもいいですよと言って、本当に日本語が何も分からない人間を連れて来ています。県とか市は、派遣会社へもうちょっと言えばいいのですけれども、それをしなないです。

覚えたい人は日本語を覚えてくださいという場はちゃんと作ってくれるのですけれども、基本の日本語は、みんなに教えたほうがいいと思います。そこで僕らも、日本語を教えながら、触れ合いながら、文化を知ることの出来る場を考えたいと思っています。

堀西：今、セルジオさんがおっしゃった言葉の壁というのは、恐らく言葉そのものの壁もちろんあるのですけれども、この社会で、どの言葉を使って生きていくかというところの壁が

すごく大きいのです。自分が、生きていく上で、自分の母語を使って生きるというのは、安心して生きる一番の基本だと思うのですけれども、移民の方が、移民として暮らす社会の中では、それが難しいという現状が、出雲に限らずあるわけです。

人権規約などでは、自分の言葉で生きていく権利があるのだけれども、実際にはそうはなっていないです。そこにきちんと立つことが必要なのだと、すごくそう思いました。

その上で、さっきのポルトガル語講座に関して言うと、先ほど申し上げたとおり、支援する側とされる側が固定してしまい、社会の中での関係性が決まってしまうのは、やはり共生とは言えないのだろうと思います。ポルトガル語講座は、多様で対等な関係を築く一つの場だと思えますし、そこでポルトガル語を教える人たちが、社会の中で自分の役割があったり居場所があったりという、そこがポルトガル語教室があることの大切さだと思います。そしてポルトガル語を勉強して話す人が増えていくこと自体が、そこで暮らすブラジルの人の安心につながっていくことであって、すごく大事なことだと思います。

福嶋：支援する側とされる側が固定してしまわない、というのは、多文化共生の核心だと言えますね。日本は画一的な社会、均等な社会という傾向があり、そこに外国人になじんでもらうためにサポートする、支援するというのが今までのやり方ではないでしょうか。一歩進めて、私たちの社会自体を多様な社会にする。いろいろなものが当たり前存在する社会にする。そのほうが私たち自身も住みやすくなるし、外国人の方も、その中の1人として入ってきても

らえる。その転換が必要だと思うのです。

日本語を一方方向で教えるだけか、互いの言語を学ぶのかの違いも、また、多文化共生プランの一期から二期への発展も、そこに通じる気がします。

今岡：今、やさしい日本語を積極的に使おうという取り組みをしています。しまね国際センターもそうですし、出雲市も、共通の言葉はやさしい日本語という形で進めています。

なぜかと言いますと、出雲市は、39か国くらいの国籍の人が住んでいます。すべての人に39言語すべてを翻訳することは非常に難しく、やはり日本語を学んでいる人もたくさんいる中、英語は分からないけれども日本語なら分かるという人も、かなりいます。簡単な日本語で災害情報を伝えるということもありますし、まずはやさしい日本語でコミュニケーションを取りましようという取り組みをしています。

今、市のホームページは、ポルトガル語と英語とやさしい日本語で配信するようにしています。英語もポルトガル語もお分かりにならないけれども、やさしい日本語だと分かるという人のために、やさしい日本語を使おうとしています。市職員へやさしい日本語の研修もしていますし、企業の方に向けてのやさしい日本語の取り組みも、それがコミュニケーションにつながるということで行っています。

福嶋：この言葉をこのようにやさしくしている、といった例があれば、いくつか教えてもらえますか。

今岡：これは、しまね国際センターが作ったものですが、例えば、欠席することは「休みます」と言うものもありますし、学校や保育所などで使われる「弁当持参」を、「お昼に

食べるものを持ってきてください」など、少しかみ砕いた言い方にします。また、ブラジルの方が幼稚園などに行っておられる際、「参観日」とは何ですか、となります。「親御さんが子どもさんの様子を見てもらう機会です」など、具体的に説明してあげると分かるので、それも「やさしい日本語」に十分なと思います。

セルジオ：効果は出ています。大きな会社では、ブラジルの人に効果があります。また、たまにアフリカ人が来て、僕もアフリカ語は分かりませんけれども、日本語は話せますと、それをお願いしますと。そのような話は簡単な日本語でします。

堀西：もちろん、やさしい日本語が万能ということでもなくて、まずは、多言語の社会があって、自分の言語で生きることができるという社会があった上で、多言語の中のひとつとしてやさしい日本語というのがあるのだと思います。

やさしい日本語も、こうすればやさしくなりますという決まったものがあるわけではなくて、私が知っている方でやさしい日本語で話されるとイライラするという人もいます。やはり、一人一人異なる言語的な背景もあり、文化も違う中で、どうやったらお互いにコミュニケーションを取れるか工夫をしていく必要があります。先ほどのお話の中にあっただよびに逃げちゃうのではなくて、お互いにコミュニケーションを取る、その工夫の一つとしてやさしい日本語が生まれてきているのだと思うのです。

やさしい日本語の取り組みとして、例えば出雲養護学校さんは、お便りを、日本語が母語ではない人のためにではなくて、ももとのシステムとして、文章をもう少しやさしい日本語で書きましようという取り組みをされています。

これは、すごく大事なところだと思うのです。

セルジオ：僕は、書けない、読めないのですが、簡単な日本語を話しできます。だから、そういうやり方であれば、大部分の人ができると思います。

最近、市内大手の会社に派遣で来ている人が雇止めになることが多いのですが、地元の小さい会社に、ブラジルサポートセンターとして、日本語が少しはできるよと言って、話させたら、じゃ大丈夫と会社のほうから言われて、何人も入れてます。

3年前か5年前に、地元の会社でブラジル人を使ってくれるところは無かったです。今はこれだけたくさん出てきて、本当にありがたいです。もう少しスピーディーに、どんどん広げていけたらいいなと思っています。

福嶋：やさしい日本語というときに、「多文化共生」という言葉自体が結構難しいかな、と思うのですが、どうでしょうか。特に外国の方に関係の深い計画ですよ。この名称も課題の一つという気がするのですが。

今岡：確かに分かりにくいかもしれませんが。それを補うために、プランの「はじめに」という項目で、多文化共生とはと説明するほかないのかなと思います。用語について、多文化共生とはどういうことかを、ここに載せているので、それで分かっていただくぐらいしか、現状としてはできないのかなと思います。

セルジオ：多文化共生というのは、日本人にはいいかもしれませんが、外国人をメインとして多文化共生となっているのですけれども、外国人には全然分かりません。勉強している外国人なら分かりますが、もう少し分かりやすくしてくれたらいいかなと思っています。

堀西：お寺も全く同じです。難しい言葉ばかり使っていますが、目の前に誰がいて、誰に何を伝えたいかと考えれば、言葉を変えらると思ふのです。

前もブラジルの方が亡くなって、うちの寺でお葬式させてもらうときに、初めてやさしい日本語で法話をしたのです。こんな機会がなければ、私もずっと仏教用語ばかりで話していたと思ひます。さっきのやさしい日本語をどうするかということも、例えば、残業という言葉は、ブラジルの方の中ではすごく浸透して、それを言い換えたほうが難しいということもあります。結局、誰に何を伝えたいかを考えるプロセス、考える気持ち、そういうものが、やさしい日本語にしても、多言語にしても、お互いの言語を学ぶにしても大事なのだらうと思ひました。それこそ子どもに対してもそうですが、相手の立場に立つからやさしいということなのだらうと思ひます。

福嶋：ところでセルジオさんは、工場を作って自分でやろうとしている、スピーディーにやらないといけな、とおっしゃいました。そのことを、もう少し具体的に教えてもらえますか。

セルジオ：これは何かと言うと、僕は3つの柱を作りました。食品をつくる団体や会社を設立し、雇用の場をつくるのですが、まず、食品の素材である野菜を畑で作る、つまり農業を立ち上げる。そして、取れた野菜を加工する工場を手に入れる。そして、それを売る販路を開拓する。日系人も日本人も、この3つの柱で輪が広がってきています。このようなやり方をしなければ、雇用の場をつくりだしていく営みが、ひいては国際交流や地域おこしなどの活動が停滞してしまうのです。

この3つでやっていたら、僕がいなくなっても続けていけるということが分かったので、そこで頑張つてやっています。僕一人でやっているのではないのです。いろいろな人が手伝ってくれる中でやっています。ブラジルの方が畑作りで16名ぐらひおひります。そして今回は、県外の人まで入っています。広島県や、兵庫県や、静岡県など、そちらの人もおひります。そのようなやり方で、皆さんと一緒にやっているとと思っています。

福嶋：農園をずっとされてきましたが、その農産物を素材に、加工の工場を作られたということですね。

セルジオ：稼働するまでは、もう1ヶ月ぐらひ必要です。加工するのは、キャッサバと、ケールと、ピーツなどです。皆さんの食文化にはないのですけれども、普通に食べられるようなものを、どんどんやっているとと思っています。

それだけではなくて、僕ら、虫まで飼つて、これから食べるようにしようと思っています。国連が食料不足として、いろいろなものを足していこうと考えています。そこで、僕らが、参加しています。キャッサバの皮を虫に食べさせて、その虫を僕らが食べるということです。虫を食べると言つても、カルシウムとして、粉にして、そばなどいろいろな中に入れます。それで、お肉の代わりになります。

この4年間、畑をやつていて、すごく変わってきているのです。それは誰にも見えていないのですが、僕らは実感で分かっています。同じものを毎年植えて、ものができるかできないか。そして虫がいなくなつてきて、どんどんちょうちょうがいな、セミもいなくなつてきました。なぜかといつたら、昔、10年か20年前、土

に薬ばかりをかけていたので、虫などがいなくなってきたのです。雨が降らないから食糧不足になるということではなくて、そのような虫も、どんどん少なくなってきました。だから、それを僕は気を付けてやっています。

福嶋：それは、農薬や化学肥料の問題ということですね。

セルジオ：過去に使われた農薬が残留していて、今の生態系に影響を与えています。今、そのような中でどうやってキャッサバを作っていくかといったら、キャッサバは、薬をかけなくてもいけるのですけれども、肥料が必要なので、どうやって肥料を使っていくかということも、これから僕らも考えていこうと思っています。

福嶋：キャッサバは学校給食にも取り入れられるというお話をお聞きました。学校給食は、ほとんどの人が子ども時代に食べています。自分の味覚、好みを育てていく上で、振り返ると給食からとても大きな影響を受けているように思います。そこにブラジル野菜が日常的にあるというのは、それこそ多文化共生を食べ物から進めていくことになり、大きな意味を持つ気がします。

セルジオ：3年契約で取り上げてもらっています。給食センターの方が中心で輪が広がって、僕がやると言ったら、いろいろな人がやるという手伝ってくれて、4年間でここまで来ています。僕らも、こうやって給食センターに携われて幸せですが、そんな簡単な話ではないです。子どもに食べさせるということが一番の課題です。ブラジル野菜ではないので。

福嶋：ブラジル野菜ではないのですか。

セルジオ：世界中の野菜です。ですから、ブラジルで一番食べられている野菜として出してい

ます。子どもたちに、こうやって違う野菜を食べてもらうというのは、本当にすごいことです。食べてくれたというだけでも、幸せだと思いますけれども、そこで僕らも、責任を持ってやっています。安いから食べてくれるというのではなくて、栄養分がたくさんあるので、どんどん食べてもらって大きくなっていける、ということを僕らは考えています。

福嶋：給食センターで、全員の食事分の野菜を揃えるというのは、日本人の農家の方も苦労されていると聞きますが、キャッサバは大丈夫ですか。

セルジオ：大変です。どこにストックしておくかなど、それをきちんと決めて、日にちとか、そういうことも考えて、絶対に手を触れないようにお願いされています。持っていくときは、冷蔵の車などで持っていってもらっています。ですから、もうけは全然ないのです。大赤字を出しています。でも、皆さんに、子どもらがキャッサバを食べたことが何回もありますよということになってくれば、それがいいかなと思っています。食べてくれるだけでも、僕らは続けていくことができます。

福嶋：堀西さんはいろいろなことを取り組んでおられると思いますが、今、特に力を入れておられること、大事にしておられることは何でしょうか。

堀西：一つは、最初に申し上げたように、今の社会をいろいろな人が住みやすいように、どのように変えていくかということで、社会全体としてどうしていくかが視点の一つとしてあります。事業としては、「いずも多文化ひろば」の取り組みを通してネットワークづくりをやっていくことです。そこで出会った人が、セルジオ

さんのように次の活動につながっていく、そういうネットワークづくりと協働のサポート、コーディネートのような、地域社会も含めて一緒にできるような場を作ることが一つです。

今までは多文化共生の仕事は、日本語教室とかNPO、市役所の「国際室」で、というふうに、一部の人でやるものというのだったのが、学校にしても、地域にしても、農家さんにしても、どうしたらみんなが安心して生きられるかということ、だんだんと考え始めてくださっていると、成果としてあるのかなと思います。

それと今、子どもたちに関わる活動としては小学生の居場所づくりをやっていますが、そこに、高校生や大学生など、いろいろな方がかかわって、それぞれの属する学校や地域で学びとして生かされていることが出てきています。

もう一つは、セルジオさんもされていますが、どのようにしたら、いろいろな人たちが働きやすい職場になるかということです。これはセルジオさんが直面しておられますが、雇止めなどで仕事を失う人がたくさん出てきたり、技能実習生も命にかかわるようなことがあったりしています。やはり、命にかかわることだという意識や、それに対する取り組みが十分ではないために起こっていることなので、それは何とかしていかないといけないということです。

私も、最近その部分を忘れがちだったのですけれども、特に大変な状況の人の相談を受けたりしていると、これは、何とかすぐに対応したり改善したりしなくてはいけないということが出てきています。しかし、スピーディーにできておらず、多文化共生という全体のところに目がっていると、そのような切実な部分が見えていないということがあります。

福島：雇止めで仕事を失う人が増えているのですか。

堀西：増えています。具体的な数字は、私も分かりませんが。

セルジオ：数百人規模と聞いています。今、一番の問題は犠牲になっている家族です。子どもがなぜきちんと勉強できないかということ、学校を替えてばかりいる。なぜかと言ったら、これから滋賀県に行って勉強する。また、新しいところに行く。親が子どものことを考えてないのです。家族のことを考えていないから、子どももダメになってしまう。本当は、出雲でずっと勉強したい子どもがたくさんいます。真面目にできる子どももいます。悪い子もいるけれども、やはり真面目に勉強するには、こちらがしっかりしてあげなかったら真面目になりません。親が、あそこで1,600円、1,800円払うと言うと、時給の高いところに行きます。

そういう家族に、親にちゃんと話をしていきます。私は、このごろずっと言っています。あなたは何を考えているのですか。自分しか考えていないのですか。子どもの未来を全然考えていませんと、何回も言います。

なぜかと言ったら、見えないところで、そういったことがどんどん加速していつているからです。子どもの未来がダメになってきているのです。そこを、誰もサポートしていないのです。そこを、もうちょっと県とか市とか考えてほしいのです。ここに住みたいという人には、できるだけのことを親などに話しかける。子どもの未来のため、ここで働いて、いろいろなことができるということ考えたほうがいいと思います。

福島：派遣で来ている方は、派遣先の企業が雇

わなくなると、結局、県外、市外に出してしまうということが多いのですか。

セルジオ：すごく多いです。ちょっとではないです。僕は、できるだけ抑えて、地域のいろいろなところに仕事を探しているのですけれども、それだけの仕事がないです。

そして、もう一つは、もうけのことで親が、向こうに行ったほうが良いと言って出ていってしまう。そういうこと続けたら、この5年、10年後にどうなりますかと考えたら、すごく厳しいです。

福嶋：もし雇用が無くなって出雲に残るとしたら、その派遣先ではなくて「自分のところで雇います」と言う地元の会社を見つける他はないですよ。あるいは農園もあるのでしょけれども。でも数百人規模では、そう簡単ではない、不可能に近いことなのでしょう。

セルジオ：市の首を絞めていることにもなります。数百人が税金を払っていることはすごいことです。全員ではないですが、居りたいと思う人には、何かしてあげたいと思います。僕が工場を建てたのも、そのためです。

福嶋：工場で、そういう人たちの受け入れを考えているということなんですね。

セルジオ：そうです。今5人が働いています。僕らみたいな人が、たくさんいたら、たくさんの方が助かると思います。それと、雇用だけではなくて、自分でやっていけるということも考えています。農業もあるし、いろいろなことができるのです。電気屋であれば電気屋で。そういう自分が経営者としてやっていけるような話もしていこうと思っています。

福嶋：それから堀西さんが、技能実習生で命にかかわるようなことがあると言われたのがとて

も気になります。差し支えない範囲で教えていただけますか。

堀西：本当の一例ですけれども、この夏に、海に行っていてエイに刺され、すぐ病院に行かなければいけない状態になりました。しかし、技能実習生たちが持っている携帯は、電話が付いていないのが多いです。

セルジオ：多いですね。インターネットだけです。

堀西：自分の国から持ってきた端末をそのまま使っていて、ネットにはつながるけれども、海でエイに刺されて連絡しようがなくて、Wi-Fiがあるところを探してあちこち動いたらしいんですが、結局家まで帰ってきて、日本語のボランティアの先生に連絡して、それでようやく病院に連れて行ってもらったそうです。

そして病院に行ったら保険証がないのです。聞いたら企業が預かっているというのです。さらに聞いたら在留カードも企業が預かっているということです。これにはちょっとびっくりしました。私は20年ぐらい前に技能実習制度と深くかかわっていて、その当時は、パスポートは企業が預かって当然みたいな感じでしたけれども、今、技能実習の法律もできて、これだけいろいろ変わってきたのですが、やはり本質としては変わっていないというのを改めて思いました。

電話機能が付いている携帯を持たないのは、経済的な事情もあります。経済的に大変な状態で日本に来ているのです。そこにあまり目が行かない。技能実習制度ができて30年、制度的な問題がずっと指摘されていて、もう廃止しようという話が大分出てきていますけれども、そういう問題がいまだにあるのだなということです。

さっきのクビになるという話もそうですし、

技能実習生もそうですけれども、いろいろな方が取り組みを続けていても、国の制度というのが変わらないところがあって、例えば、日系人の方たちの多くが派遣会社の派遣社員として主に工場で働くというのが、もう30年ずっと変わらないではないですか。さっきの子どものことにしても、親も大変で、少しでも給料が高いところへ行かざるを得ない、という現実もあります。それはずっと変わらない日本の政策の犠牲になっているという思いがあります。

セルジオ：チャンスを与えてあげたらいいのでは…、もう少し何かで。僕らは分からないことがたくさんあるけれども。

堀西：本当は、就労制限がないのですから、どんな仕事でもできるけれども、現実としては、仕事ができる場が決まってしまっているのです、そこを開拓していく必要があるということだと思います。それが社会全体として、そうしていきたいということになっていないのが、すごくもどかしいです。

セルジオ：本当に難しく、やはり初めに言ったとおり、文化というのが壁になっています。簡単に解決できることではないので、皆さんが集まって、どうやっていくかということを直接考えたほうがいいかなと思います。

福嶋：重要な課題ですね。外国人住民の増減自体は市の統計で分かると思いますが、やはり減ってきていますか？

今岡：(2022年の)7月、8月くらいから総数が少しずつは減ってはいますけれども、一時期4月、5月くらいのときは、増加はしていました。

堀西：この4ヶ月、5ヶ月、夏くらいから減っています。出雲は新型コロナの影響というのは

逆に少なく、たしか外国籍人口は7月が過去最大で、5,200人ぐらいでしたか。その頃から徐々に減っています。市内大手のA社さんは、部署によって仕事が急に減ったりすることがあるということを知りました。

セルジオ：皆さんが言うには、切られるのは仕事が無くなったからで、どうしようもないということです。A社も仕事が無くなってきているのです。日本人社員を入れるところがないので外国人を出して行って、という話はよく聞きます。

堀西：そうです。出雲の場合は、A社さんの経営状態の変化が、そのまま外国籍人口の増減につながっています。2019年くらいにも一気に減ったときがありました。

セルジオ：リーマンショックなどのときです。僕が農業を考えたのもそのときです。仕事がなく、大変だったのに助けようがないのです。そこで、農業だったら出雲に残せるということです。

農業は、農業作業だけではなくて、電気のいろいろな設備を作ってテクノロジーを使いながら農業をやっていくというのもあって、若い者を入れていくことを考えたら、すごくいい仕事だと思います。小さなところでいろいろなものを作っていくことを考えたらいいのですが、誰もしない。若い者がたくさんいるのですけれども、こういうことに興味を持っている人もいます。電気のエンジニアとか、設備のエンジニアなどです。

農業をやることだけではなくて、いろいろなことができるということです。

福嶋：それからセルジオさんは前に、自分たちが農業を広げ、耕作放棄地を農地に戻していく

ことによって、まちづくりにも貢献できるとおっしゃっていました。まさに、支援する側、される側が固定されるのではなく、地域づくりのパートナーとしての実践だと思えます。

セルジオ：佐田町のほうに工場を作っているのですけれども、山や川しかなく、植えていく面積は少ないのだけれども、そういうところでもいろいろなことが出来るので、少しでもまちづくりに参加できたらということ、やろうと思っています。

ブラジル人は、上から下へ命令されて、それに従うというやり方はあまりせず、それぞれが自分の考をもってやります。日本的なやり方は少し違うかもしれませんが、佐田町の方々は、町も小さいのでよく話をしながら、聞きながら、一緒にまちづくりをしていきたいと思えます。まだ、これからです。

福嶋：とても期待しています。次に今岡さん、文化国際室として、いろいろなことはされていると思いますが、今、特にここを重点にやりたい、あるいは力を入れてやっているというものはありますか？

今岡：多文化共生は文化国際室だけがやることではなくて、それぞれの各担当課ができることを、自分たちで考えてやっているのです、特にこれを重点的にというわけではないのです。例えば、就労支援だったら、産業政策課が担当し、教育のことは学校教育課が担当しています。すべて多文化共生プランに基づき、各課が考えております。

文化国際室では、通訳を配置していますが、ポルトガル語の通訳を1名増員して、斐川行政センターにも常時1人を配置できるようにしたのが、今年度の大きなことです。また、皆

さんに多文化共生について考えてもらう研修会の開催など、いろいろな団体に補助金を出すなどしています。けれども、特に何か今年度変えているものではなく、文化国際室も多文化共生プランに基づきやっています。

福嶋：私も、文化国際室の役割は自分で全てをやることではなく、市全体が多文化共生に取り組むためのコーディネーター役、司令塔になってほしいと思っています。そのためには、市全体の動き、各課の動きを、細かいところは別にしてトータルに把握して、出雲市全体としての課題や重点を示し、各課の動きをつなげていく必要があるのではないのでしょうか。言うのは簡単でも実行するのは大変だと思いますが、ぜひ期待したいと思えます。

セルジオ：市役所が、いろいろなことで手伝ってくれると僕は分かっています。問題は、考え方が違うのです。キャッサバをいろいろなところに出していきたい、出雲キャッサバとしてやっていきたいと思ひ、今、6トンぐらい植えています。

そこで、何か市として手伝ってくれるか相談したら、売るところがないのに、何でそんなに植えましたかと一。日本人は、売るところを作って植えていく。僕らは実験をしているから、新しい食文化なので、作って、これがありますよと売っていききたいのです。そういう手伝いをしてほしいと言っているのですが、結局、自分でやるしかなくなっています。

もうちょっと考えてほしいところは、そこです。

福嶋：今、販路をどうやって開拓されようとしているのですか。

セルジオ：今度、いろいろなスーパーで入れてもらうように話をするようになっているので

すけれども、僕は自分でやっています。JAが、いろいろなことで手伝ってくれて、土地を貸したりして、建物はもらったのですけれども、ただでもらったからといっても、すごく税金が掛かっています。大変ですけれども、やっていくしかないと思っています。

僕はブラジルから日本に渡ったときに借金をして来ています。飛行機代、あの当時35万円を借金して来て、そこで働いて払います。日本人はある程度の保証の下に、慎重にものを買うと思います。考え方が違うのです。

実は僕は日本人で、外国の血は全然ないです。うちのおじいさんがブラジルに渡ったのです。向こうで開拓しながらやっていて、僕がまた、やはり日本に来たいなど。だから、本当に日本を僕は応援しています。日本が大好きです。こうやって生きている土地でキャッサバとか作って、もう4年目になるのですけれども、思ったら、やはり外国人だなと思って考えます。

堀西：セルジオさんのお話を聞いていて改めて思ったのですが、ずっと考えているのは、今まで、同じ文化、同じ言葉話す人がほとんどの社会でやってきた。実際には、もともと数は少なくてもブラジルの方がおられたり、中国の方がおられたり、いろいろな方がおられたのだけれども、今、いろいろな文化が、この出雲というまちにあって接点ができて、そこで文化が違うということがようやく分かってきた。合わせていく難しさとおっしゃったんですけれども、当然違いはあるのだよということだと。なので、日本は今までこういう制度でやってきたが、そこに新しい文化、考え方が入ってきたときに、それを、どうやって新しい仕組みとして考えていくのか、ということ。実はこういう背

景があって、このような考え方なのですよとか、さっき話に出た、借金をして来られるというのは、何で借金が必要なのかと。そういう背景もお互いに知りながら、どういう仕組みを新たに作っていくかということだと思います。そして、その間に立つ人、つないで、そこをうまくコーディネートしていく人、そのような機能が本当に必要だと思います。

結局、それがないと、自分たちは自分たちでやってしまおうとなる。そこで分断やすみ分けが生じてしまいますけれども、やはり目指したいのは、誰でも入れる仕組みがあって、そこにベトナムの人もブラジルの人も日本の人も、もっと言えば、ブラジルで生まれてカナダへ行って今は日本にいる日本国籍の人など、いろいろな人がいて一緒に作っていく。出来上がったものが多文化共生ではなくて、そういう人が一緒にできる仕組みを作っていく過程が、多文化共生ということなのだろうと思うのです。

セルジオ：それが始まりだということ。そこでグローバル化ということが出てくるのです。同じことばかり考えずに、いろいろなことを考えていかないといけないということです。

堀西：作っていくとき、必ずぶつかり合いがあるのです。そこを間に入る人がいたり、調整する機能があったりして作っていくのだろうと、僕は改めて思いました。

福嶋：そういう場を作っていく、コーディネートをしていくリーダー役、中心は、民間なのでしょう。行政なのでしょう。どう思われますか。

セルジオ：それは民間ではないですか。なぜかと言ったら、民間の人は自分でお金を出して自分の責任でプロジェクトをするので、行政とや

り方や責任感が違います。自力でやるしかなく、それだけ必死にやる。どこでどうやっていくかということ、しっかりやっていくのです。市とか県は、どうなっても大丈夫という、やはり、そういう考えがあるように思います。

堀西：自分がイメージするのは、民間にも、行政にも、そのような資源や、考え、お金、方法などは、それぞれにたくさんあると思うのです。どちらが主導ということではないのですけれども、ただ、民間が現場に近いので、現場が声をあげていくということは、まず必要だと思います。それを行政にサポートしてもらおうというよりは、思いとしては、一緒に作っていききたいというのがすごくあります。行政は社会づくりに一番力を持っているはずですが。社会の仕組みを作るにしても、変えていくにしても、やはり行政機関というのは、そういう役割を担っていると思います。

どちらが中心かという答えはないのですが、多分、第二期の多文化共生推進プランは、一緒に作る、ということを考えている。ただ、具体的な方法のところが進んでいないです。

福嶋：両方で一緒にやっというとき、「協働」という言葉をよく使います。分かりにくい日本語のトップだと、私は思っているのですけれども一。何となく「協働」という言葉で曖昧にせずに、民間が何をやるのですか、何に責任を持つのですか。行政は何をやるのですか、何に責任を持つのですか。責任を持つということは最終的な決定権も持つということですが、これらをきちんと共通認識にした上で一緒にやっていかないと、結局うまくいかないとと思うのです。その分担や連携の在り方は、ケースバイケースで良いと思いますが。

ところで、一般的に行政がやることの一つに補助金の支給がありますが、文化国際室で担当されている補助金というと、イベントなどが中心ですか？

今岡：イベントだけではなく、日本語教室など、ソフト事業に対しても補助金を出していますし、言葉で言うと難しいのですが、多文化共生を推進する活動に対して補助金を出しています。

福嶋：私が市長をしていた千葉県我孫子市では、補助金を欲しいという団体を公募し、応募があったものを市民の審査委員会で審査するという仕組みがありました。もちろん、最終決定は市長が責任を持つのですが一。

出雲市でも、多文化共生にかかわる補助金については、外国人の意見を聴く仕組みを作れないでしょうか。どんな補助制度がいいとか、この補助金は可とするか否とするかみたいな判断をするとき、日本人の発想だけでやらず、外国人の方の参加もほしいなと思ったのです。日本人と外国人は文化が違うというお話もお聞きして、少し我孫子の制度を思い出しました。

今岡：補助金を管轄する部署もありますし、3年ごとの見直しといったこともありますので、今すぐということも難しいかもしれないですけど、今度見直しする時期には何らかの形で、そういったこともできるといいかもしれないんですが、私の段階で、これをどうしますとは言えないので、ご意見としてお伺いしておきます。

セルジオ：補助金は税金ですから、そんなに簡単に使えるものではないと思います。

福嶋：そうですね。税金だからこそ、きちんと市民に役立つように使いたいです。

補助金だけの話ではなく、少し大きな話にな

りますが、日本の行政は、制度を作るときは、とても困っている人、支援を必要としている人のことをすごく思って作るんですよ。でも制度が出来上がると、その思いが消えてしまって、制度どおりにやる、規程どおりにやる、というのが自己目的化する傾向があります。それを常に気を付けて、この制度を作ったもとの思いは何だったのかということをお忘れず、当事者の意見を聴いて、日常的に制度自体を見直していくことが必要だと思っています。

セルジオ：役所等で書面に書いてあるルールがあるので正しい、書いてないので駄目といった自分の頭で考えないやり方ではなくて、自分の頭で考え、創造する、そういう人が成功していくと思います。人間の脳の働きは本来、凄いものがあるんですね。

福嶋：新しい時代をつくっていく人たちは、間違いなく自分の頭で考える人ですよ。

もう時間が迫ってきましたので、最後に、これからの自分の夢を語ってもらえたらと思います。こんなふうにしていきたいという希望もあるし、これからこの一歩をやるのだという決意もあるでしょうし、市としては次にこんな課題を考えているということもあると思いますが、堀西さん、いかがでしょうか。

堀西：さっき、セルジオさんの虫の話が面白いなと思ったのですが、虫を含めて、バランスを保っていたものが、今、少し崩れている。それを、虫も人もすべて含めて、世の中をどうやって調和させていくのか、それは多分、命の共生ということなんだと思います。多文化共生ということをもっと広い意味で言えば、命の共生だろうなと思うのです。

それは、例えば気候のことなどもそうですね。

うし、人間が生きていく上で、人間の社会はこういうものだろうかとか、本当に安心して生きることとはどういうことか、ということにもつながるのだと思います。

個別の課題は本当にたくさんあるのです。個別に考えていくと子どもさんのことや制度のこと、たくさんあって、全部を見てしまうと何からやっていけばよいか分からなくなってしまうんですけども、自分は僧侶という立場からでも、どうすれば安心して生きていけるか、というところは常に求めているな、と思います。

その中で、行政がという意味ではなく、ひとつのまちとして、社会として、こんなふうにしたいというのを描いて出すことが求められていると思います。ただ、そういうものを出していくときに、多文化共生というどうしても片隅に追いやられるのです。いろいろな市民がいて、多様な生き方があって、それを大事にしていく。外国人と日本人とのことではなくて、ひとつのまちの経営、運営の柱を示すということが、まちの姿として、もっとあるといいと思います。実際、現場でやっている、どうしても「日本人と外国人」という壁があります。外国人の施策ということではなくて、このまちは、すべての市民の安心を目指す、という示し方だと、結構、皆さんに理解してもらいやすいと思うのです。そういうものを打ち出していけるような取り組みに、自分もかかわっていきたいと思います。

それが、例えばネットワークづくりや、資源をつなぐような取り組みにも広がっていくのだと思います。その先の夢はというと、まだまだいくつもハードルがあると思いますが、ベースにあるのは戦争が起こらない世の中にするとか、そういうところだと思います。多文化共生は、

そこと同じ土台の上にあると思うのです。

福嶋：ありがとうございます。広い意味での共生であったり、インクルージョンであったり、そして平和であったり、それをまちづくり、社会づくりの柱にするということですね。

堀西：そうです。それは非常に小さい社会かもしれないし、そういう社会の集合体としてのまちかもしれません。その両方の視点を持っておきたいと思います。

福嶋：ありがとうございます。

セルジオさん、今までの中で随分、これからの方向を、ブラジル村などの構想も含めてお話しただいたと思います。最後、さらに何かありますでしょうか。

セルジオ：僕としたら、やはり、こうやって時代の流れがどんどん変わってくるということは分かっていますけれども、これからも出雲市が、ブラジル人、外国人を受け入れながら頑張っているまちになってほしいです。それが幸せと思っています。

福嶋：ありがとうございます。

今岡さん、市として、文化国際室としてどうでしょうか。

今岡：関係部署が市役所全体で協力し合って、ひとつひとつの課題に取り組んでいければいいのかなと思っています。そして、お互いが住みやすい「まち」になればいいなと思っています。

福嶋：ぜひ、そういう出雲市になることを期待して、ちょうど時間がきましたので、以上にさせていただきます。きょうはお忙しい中、本当にありがとうございました。心から感謝いたします。

Glocal Design Proposal : Izumo City

Hirohiko Fukushima, Professor
Institute of Social System,
Chuo Gakuin University

Abstract

We would like to enrich the local community through cooperation and exchange with foreign countries and partnerships with foreign residents. As part of this research, I will take up Izumo City, Shimane Prefecture.

Especially in Izumo City, there are many Brazilian residents who work for major companies in the city. Therefore, the challenge is to build a society in which diverse cultures coexist.

Section I covers (1) basic information such as population, (2) economic situation, (3) tourism and cultural exchange, (4) life and residence of foreigners, and (5) coexistence of diverse cultures of Izumo City.

In Part II, three people engaged in activities related to foreign residents in Izumo City gathered to discuss the challenges and future prospects of creating a society in which diverse cultures coexist. I would like to raise this issue with this proposal.